日本人のための福音理解

2012年4月1日
西九州伝道所
佐々木正明

はじめに

私たちは日本人です。日本に住んでいて日本人に福音を伝えようとしています。もちろん日本人と言っても千差万別です。都会に流れる若者もいれば田舎に残る高齢者もいます。国際化の波に乗っているものもいれば、頑固に日本の文化を守っている人たちもいます。それでもやはり、大部分の日本人は日本人の感覚と言うか、日本人独特の感性を持っています。

そのような日本人に福音を語るときでも、私たちは西欧で発展させられ、構築されてきた神学的背景をもって、西欧人に対するのと同じように福音を語ろうとします。私たちは日本人に福音を語るときも、「日本人に」と言うことよりも、「福音を」と言う点に重きを置いています。つまり、「誰に」語るかではなく「何を」語るかに取り組んでいます。神学校などの訓練も、95パーセント以上は「何を」に焦点が当てられているのです。そしてその「何」は、あくまでも西欧で発展させられた神学の福音であり、それを西欧で造語された言葉で表現したものを、無理やり漢字をつなぎ合わせた「日本語」にしたものなのです。

福音は、福音として理解されなければ福音になりません。さらに福音は受け入れられなければ福音になりません。反ってそれは裁きになってしまいます。日本で福音が語られたとしても、ほとんどは福音として理解されていません。たとえ頭脳では理解されても、心では受け入れられていません。日本の福音伝道は、西欧的に理解された福音を西欧的なやり方で伝えようとしてきたために、耳かきに乗るほどの数の西欧志向の日本人しか、クリスチャンにならないでいるのです。

日本人にとって福音が福音となるためには、日本人に理解されやすい言葉と方法で、また受け入れられやすい形で提示されなければなりません。この小文では、まず、①　私たちが理解している福音は、西欧的な福音理解の輸入であることについて語ります。次に、

② 西欧的な福音理解以外の福音理解の可能性について語ります。その上、③ 福音を語る対象の日本人の宗教意識について語ります。そして ④ その日本人に、本当に聖書的な福音を提示するにはどうしたら良いかを考えます。これらを今述べた順序に語るのではなく、そのような事柄を意識しながら論を進めて行きたいと思います

Ｉ． ユダヤ人に与えられた旧約聖書

西欧キリスト教の福音理解は、まず、旧約聖書の理解が基本となっています。それが悪いと言うのではありません。新約聖書も旧約聖書を基盤としているものです。旧約聖書は、一点一画誤りのない神の言葉であると言うのが、私たちの理解です。ただ問題は、旧約聖書がユダヤ人に与えられた書物であると言う事実が、ないがしろにされている点です。もちろん、広い意味では全人類に与えられたと言えますが、直接には、あくまでもユダヤ人というひとつの民族、すべての民族の救いのために神に選ばれた器としての、ひとつの民族に与えられたものです。

ユダヤ民族は非常に特異な民族です。神がご自分こそ神であることを、不思議、奇跡、救援、裁き、そしてモーセを始めとする多くの預言者たちを通しての、啓示と教えで示してくださいました。このような神の明らかな啓示、あるいは自己顕示は他の誰にも、どの民族にも与えられず、ただユダヤ民族だけに与えられたものです。ユダヤ民族だけが神の「契約の民」となり、神との夫婦関係にたとえられるような、特別な立場に立たされたのです。旧約聖書には、神が夫でユダヤ民族が妻であるような表現が、そこここにあるとおりです。

旧約聖書の教えや戒めが、直接的にはこのユダヤ民族に与えられたものであり、神との特別な契約には入れられていない、他の民族に与えられたのではないという事実は非常に大切です。その基本を理解していないと、とんでもない間違いに陥ります。事実、そのとんでもない間違いが至るところで、繰り返されてきたのです。

ひとつの顕著な例を挙げましょう。偶像礼拝禁止の戒めです。しばしばキリスト教の宣教師や牧師、さらには信徒たちまでが、日本人は偶像礼拝者だと断罪します。福音を語るよりも、偶像礼拝の罪を指摘して攻め立てることを、自分たちの使命と心得てか、誇りとしている団体さえあるほどです。ところが偶像礼拝禁止の命令は、疑いを差し挟む余地がないほど明らかに神の奇跡を体験した、ユダヤ民族に対して与えられたものです。「私はあなたの神である」という明確な宣言があって、それを前提として与えられた律法です。あたかも、「私はあなたの夫である。他の男に目を向けてはならない」と言うかのように、夫

婦関係が譬えとされ、偶像礼拝が姦淫として責められているのです。

この律法を、神の明瞭な自己顕示も奇跡の助けも経験しておらず、夫婦の契約関係にも入っていない、ユダヤ民族以外の人々に直接当てはめるのは間違いです。（偶像礼拝についての詳細な議論は、拙著「　　　　」を参照）旧約聖書を読むと、ユダヤ民族が偶像礼拝をすると、神の厳しい刑罰がありました。ところがユダヤ民族以外の民族が、偶像礼拝をしているからと言って裁かれている例はありません。ユダヤ民族以外の人々が偶像礼拝に関わる事で裁きを受けたとしたら、それはユダヤ民族の中に偶像礼拝を持ち込む危険性があったためで、あくまでもユダヤ民族の宗教的純粋さを保つためです。現在、ユダヤ民族ではない日本人が、またユダヤ民族に偶像礼拝を持ち込む危険性もない日本人が、偶像礼拝の罪で、旧約聖書に見られるような神の厳しい刑罰の対象になることはありません。

ユダヤ民族が選ばれた目的は、救い主が生まれる血筋の民族として、宗教的純粋性を保つためでした。ですから神は、間違いの余地がないほど明らかに、ご自分を顕現してくださった上に、旧約聖書を通して罪を示し救い主の必要性を教え、やがて救い主が与えられると言う約束を与えて慰めてくださったのです。また、その救い主の働きを予め象徴的に教える、さまざまな宗教儀式を定めいろいろな出来事も起こしてくださいました。ユダヤ民族が、救い主を誕生させる民族としてふさわしくなるように、長い歴史を通して、神は準備を整えてくださったのです。その準備の顕著な現われが偶像礼拝の排斥というわけです。

偶像礼拝の根絶は非常に困難な働きでした。イスラエル民族が、民族として完全に偶像礼拝から手を切ったのは、バビロン捕囚の苦しい体験を通してのことです。それまでの千年以上にわたるイスラエルの興亡は、偶像礼拝禁止の厳しい掟を頑なに破り続けるイスラエル民族の罪と、それに対する神の激しい憤りと刑罰の歴史と言えるものでした。その歴史の視点は当然、民族あるいは国家にありました。旧約聖書の大部分は、神の刑罰の器として用いられた様々な民族や国家と、イスラエル民族の血みどろの戦いの記録であり、まさに残忍で残虐な殺し合いの歴史物語です。

西欧のキリスト教は、旧約聖書に現されたこの偶像礼拝に激しく憤る厳しい神を、イスラエル民族という「妻」の姦淫に対して、ご自分を現された神の姿であるという理解を持たないまま、世界中のどこに行っても、どの民族に対しても、偶像礼拝を憎み怒り狂う恐怖の神として語り続けたのです。何百何千どころか、何万何十万という人々を激しい怒りをもって容赦なく滅ぼしつくした、恐ろしい神のイメージをそのまま自分たちの信仰と行為に表現したのです。

たとえば、欧米キリスト教国の植民地政策の歴史を見ると、いわゆる、現代的なヒューマニズムの精神などほとんど見当たりません。キリスト教国ではない国々、あるいは民族を情けも哀れみも見せることなく蹂躙し、奪いつくし滅ぼしつくしています。彼らは偶像礼拝者なのですから、哀れみの余地はなかったのです。西欧キリスト教は、自分たちを神に従う正しい信仰の持ち主と考え、自分たちを神のために戦う軍隊と心得、偶像礼拝者たちを滅亡させることに正義感さえ感じていたのです。日本にも、血を血で洗うような戦いに明け暮れた、戦国時代がありました。それでも武将たちは、日本人らしい礼節を重んじながら戦ったものです。西欧キリスト教国の残忍さは、日本人の感覚では理解できないほどのものです。

近代ヒューマニズムが世界を取り巻き、寛容の精神が人々の心を支配し始めている今の世界で、植民地時代のキリスト教国の残虐さは影を潜めたとはいえ、偶像礼拝者を敵として攻撃し続ける西欧キリスト教の精神は変わっておらず、宣教師や牧師たちでさえ、福音を語り伝える前にあらゆる信仰形態を偶像礼拝として断罪し、糾弾し、責め立てることによって、福音を聞かせなければならない人々を、まず敵にしてしまっているのです。自分たちの信仰形態や宗教あるいは伝統を、大切にしない民族はありません。みな、そこに愛着と親しみとアイデンティティを感じているのです。それらを貶（けな）され、賤しめられ、非難され、罵倒されて、心を開く人などありません。日本人の多くは、福音を聞く前に福音に対して心を閉じています。

もちろん神の優しさや哀れみ深さは、旧約聖書のそこここにも見られますし、一人ひとりの人間に対する思いやりあふれたお取り扱いも、繰り返して記録されています。敵国の首都ニネベに対する神のお取り扱いや、ザレパテの寡婦はもとより、ラハブやルツなどの外国のちっぽけな女性に対する神のご配慮を読むと、まさに感動ものです。しかし圧倒的に厳しい怒りの神、民族や国家のためにお働きになる戦いの神のイメージがあまりにも強く、神の優しい姿がかすんでしまったのです。同じ父親でも、ピクニックで優しく息子に弁当を食べさせる姿と、諭しても叱ってもいうことを聞かず、危ない遊びを続けている息子を、厳しく叱り続けている姿はまったく異なります。旧約聖書に現れている神の姿は、ほとんどが、どうしようもない息子を厳しく叱りつけている親としての、神の姿なのです。

Ⅱ.　ユダヤ・グレコローマン文化の人々に与えられた新約聖書

一方新約聖書には、ユダヤ民族が待ち望んだ救い主の到来と、その働き、そしてその救い主によってもたらされた、新たな「神の国の福音」の理解が記され、さらに、その福音がユダヤ人の枠を越えて異邦人たちにも与えられて行く過程が記されています。旧約聖書

は、救い主を世に送り、全人類に救いをもたらすための器として選んだ、ユダヤ民族を守り通すために、主に民族や国家という単位で、人間をお取り扱いになる神について記録しています。しかし救い主が到来した新約時代になると、一人ひとりの人間に目を注ぎ、特に小さな者、弱い者、虐（しいた）げられている者、社会の片隅に追いやられている者に思いを寄せてくださる神に、焦点が当てられています。

ところが、神の救いの約束を誤解して、民族的、国家的救いを夢見ていたユダヤ人たちは、ローマ帝国に反逆の筵旗（むしろばた）を揚げる機会を覗っていました。それなのに、待てど暮らせど御輿を上げようとしないキリストに失望し、結局、十字架にかけて殺してしまいました。そのときから今に至るまで、ユダヤ民族は他の救い主の到来を待ち続けています。ただ当時でさえも、わずかのユダヤ人たちが、キリストの救いの本来の意味を少しだけ理解し、キリストに従う者たちの集団を作り上げました。これが教会の始まりです。

この教会は、初めのうちこそユダヤ人たちの集団でしたが、まもなく、多くの異邦人たちが加わるようになり、異邦人への伝道も活発になって行きました。ここで必要になったのが、神の救いはユダヤ人だけに限られたものではなく、異邦人もユダヤ人とまったく同じ条件で救いに入ることができるという、「福音の新しい理解」でした。

ユダヤ人たちは、バビロン捕囚以後、天地創造の神だけを礼拝する徹底した一神教になりました。それからも、次々と新しい異民族支配の下に蹂躙されてきた中で、自分たちの周囲に住む偶像礼拝者である他民族に対して、武力で裁きを下す力は残っていませんでした。彼らはむしろ偶像礼拝者に支配されながら、彼らと共に住み暮らす以外に方法がなかったのです。その中で以前と異なったのは、イスラエル人は異教徒たちと暮らしを共にしながらも頑固に自分の信仰を守り通し、偶像礼拝には二度と再び陥らなかったということです。

偶像礼拝者と武力抗争をせずに棲み分ける環境は、特に離散したユダヤ人たちの間では当然のこととなり、異邦人との間にも、同じ人間としての親しい付き合いも生まれました。その中でユダヤ人たちは自分の信仰を積極的に証し、多くの改宗者たちを作って行きました。ユダヤ教は偶像礼拝者たちを憎み滅ぼす宗教から、偶像礼拝者に正しい神を教え、この神を信じるように勧める宗教に変わって行ったのです。本当のところ、ユダヤ教は非常に宣教的な宗教となっていたのでした。

新約聖書が書かれたのは、そういう過渡期の終りころでした。そこでは当然、ユダヤ人に与えられた旧約聖書が福音の土台として認識され、すべての議論が旧約聖書の解釈の上に建てられていました。キリストの「神の国」を中心とした新たな教えさえも、旧約聖書

の教えに反するものではなく、むしろそれに新しい光、新しい解釈を与えるものとして受け取られたのです。

キリストの昇天後、生まれたばかりの教会も、旧約聖書を唯一の神の言葉の記録として、絶対の権威を認めていました。彼らにとっての旧約聖書は、単にユダヤ人に向けて語られた神の言葉ではなく、普遍的な権威を持つものでした。彼らは旧約聖書から導き出した彼らの結論であるユダヤ主義、つまり、旧約聖書を普遍的権威として置いた理解を、新しく教会に加わり始めた異邦人にも適用し始めたのです。それは一般の離散したユダヤ人たちが、改宗者を作っていったのと同じ過程でした。彼らにとっては、キリストの神の国の教えも、ユダヤ主義の中で充分に取り扱える主題だったわけです。

異邦人への使徒として、ユダヤ主義の間違いを打破して、異邦人のための神学を打ち立てたパウロの議論のよりどころも、旧約聖書の解釈でした。彼は、ユダヤ人に与えられた神の言葉である旧約聖書の権威を認め、その旧約聖書の解釈として「信仰による義」を打ち出しました。自分の神学が自分の頭から搾り出されたものでも、まったく新しい啓示だけに頼った独自のものでもなく、あくまでも神の言葉である旧約聖書によって支えられるものであることを主張したのです。ただパウロは、異邦人への神学を打ち立てたと言うよりも、異邦人への伝道という目前の必要性に対処して、旧約聖書の権威に頼み、それを解釈し直したというべきなのです。

パウロはユダヤ・グレコローマンの文化の中に生き、神の救いを宣べ伝える者として、ユダヤ・グレコローマンの文化に生きる人々のための神学を主張したのです。それはユダヤ民族の枠の中に閉じ込められていた、神の救いについての理解の改革であり、福音の普遍化の走り、普遍的福音の理解の始まりだったのです。

パウロの神学は福音の普遍性を高らかに謳い上げるものでした。ただし、あくまでもパウロの諸事情が求める範囲でのもの、当時の実情への対応のなかでの普遍的福音の理解でした。ユダヤ・グレコローマンの文化に生きていた人々のために、ユダヤ人に与えられた神の言葉を適用したものだったのです。そのパウロの理解の中には、21 世紀の世界に生きる私たち異邦人に対応できる、普遍的福音の理解の種、あるいは芽生えはありました。とはいえそれは、パウロが知っていた、ユダヤの宗教と文化の影響をかなり強く受けた、グレコローマンの人々に対するものとしては充分であっても、現在の私たちのような「完全な異邦人」に対しては、まだ充分には考察も議論もされていないものです。

旧約聖書の中には、パウロが必要としたユダヤ・グレコローマンの文化の人々のための、普遍的福音の理解の種があり芽生えがありました。同じように、パウロの「信仰による義

認」の議論の中に、現代の異邦人世界に対する普遍的福音の基盤ができています。もっと言うならば、パウロが用いたアブラハムの物語の中に、すでに、現代の異邦人世界への普遍的福音の芽生えがあったのです。それを、現代の異邦人である私たちが、ユダヤ的な旧約聖書の理解、あるいは西欧的な神学の影響の下にあって、理解することができないでいるのが、なんとも歯がゆいのです。

聖書は、旧約聖書だけではなく新約聖書も、当時に生きていた人たちのために書かれたのです。それを後の時代の私たちが、誤りのない神の言葉として、自分たちにも語りかけられているものとして読んでいるのです。そのように読むとき、私たちは、あたかも聖書が直接自分たちに与えられたかのように、勘違いして読むことが多いのですが、正しくは、私たちには、あくまでも、間接的に与えられているのです。ですから、聖書に記されている様々な教えや戒めや命令を、その当時の背景と実情の中で理解し、その教えや戒めや命令の土台となっている神のみ心を探り出して、それを自分たちに適用するのが正しい聖書の読み方です。

言いかえると、聖書はあの時代、あの場所で、あのような状況の中にあったユダヤ人のために、神の変わらない御心が適用されて与えられたものなのです。たとえば、人間に対する神の御心は、すべての人間が互いに愛し合いながら生きることです。ところが旧約の時代には、その神の御心をそのまま教えることができませんでした。多くの偶像礼拝と不道徳に満ちた民族に取り囲まれながら、宗教的純粋さを保つことが何にもまして重要であった当時のユダヤ民族に対して、すべての民族や血族の壁を越えて、互いに愛し合いなさいとは教えることができませんでした。旧約聖書で教えられた隣人愛は、あくまでもユダヤ民族の中の隣人であり、偶像礼拝をしている隣の民族はふくまれていなかったのです。民族の垣根を越えて互いに愛し合うという、神の本当の御心、普遍的な御心が示されたのは、ずっと後になって、キリストの口を通してのことです。

したがって、聖書の中から普遍的な神の教え、戒め、命令を探す努力が必要です。旧約聖書のほとんどの教え、戒め、命令は、時間と状況という制約の中で、ユダヤ民族という特異な民族に合わせて与えられた神のみ心の提示であって、時間と状況と民族と文化を超えて、すべての人間にそのまま当てはめることができるものではないのです。そういう意味では新約聖書も同じです。新約聖書にはより普遍的な教えがあることは確かですが、あの時代、あの場所に、あのような状況の中で生きていた、クリスチャンたちに与えられたのであって、現代の日本人クリスチャンを想定して書かれたのではないからです。

そういう意味で、聖書６６巻の中で、イスラエル民族がまだ発祥していなかった当時のことが記されている創世記は、より普遍的な神の御心が現されている書として、私たち異

邦人には非常に重要な書物となります。

聖書に示された神の御心の多くが、聖書が書かれたときに読者として想定されていた人々の、実情に合わせた神の御心の提示であり、神の御心そのもの、原則、あるいは普遍的な神のみこころとは違うことを、例話で説明しましょう。日本で車を運転するときは、道路の左側を運転します。これは運転の基本の基本です。ところが、アメリカでは右側を運転します。まったく逆です。でもこれは、安全に車を運転するという同じ原則から派生したものです。二つの法律の違いはまったく同じ原則から出てきていることを理解して、アメリカに行ったときは日本人も右側を運転し、日本に来たときはアメリカ人も左側を運転します。表面に現れた教えや戒め、あるいは命令の中にある、隠れた原則を探り出す度努力が大切なのです。

旧約聖書では一夫多妻が認められ、それについての教えが記されています。新約聖書の時代でも奴隷制度が認められ、それに関する戒めも幾度も残されています。だからと言って、神が一夫多妻を承認しているのではありません。また奴隷制度はそのまま残されるべきだと言うのでもありません。より広く聖書を読むと、そのような習慣や制度は神の性質に合わないものであることは明らかですが、神はその当時の社会状況の中で、人々がよりよく生きることができるように、悪い制度であっても間違った習慣であっても、忍耐を持って認容して、その実情にあった教えや戒めをお与えになっているのです。このように、聖書の教えや戒めや命令のほとんどは、当時の人々の実情に合わせて与えられた、神の御心の提示なのです。それを理解しないと、やたらに偶像礼拝を糾弾することが伝道であると勘違したり、女性は教会の中で黙っていなければならないと、思い違いをしたりすることになります。

Ⅲ.　宗教改革とプロテスタントの発展

キリストの時代には、すでに 39 巻からなる旧約聖書が存在していました。新約聖書も、それぞれの書の評価はまちまちでしたが、教父の時代のうちに、一応 27 巻の書物からなる書物として、認められるようになりました。ただし、印刷技術がなかった当時、圧倒的な数に及んだ巷のクリスチャンたちが、これを手にすることはできませんでした。せいぜい大きな教会、高位の聖職者が断片的な書き写しを所蔵できた程度です。したがって、現在のように聖書を学び、そこから神についてあるいは人間の救いについて考えるという、本来の神学の発展は少なく、ものを考えることのできる人たちが聞きため読みためた、旧約聖書や新約聖書の断片にある教えを基にして考察したとはいえ、当時のギリシヤ哲学という世俗の手段で、自分たちの宗教思想を発展させる以外に方法はなかったのです。

そういうわけで教父の時代には、偉大なキリスト教思想家や神学者の出現はありましたが、彼らが残したものの多くは、聖書神学とは別のものといわざるを得ません。さらに、いわゆる暗黒時代に入ると、(5 世紀から 16 世紀の 1000 年以上の期間) キリスト教思想家の数も、神学者の数も激減してしまいます。聖書は、まじめな宗教者たちが隠遁生活を送りながら神に従う道を探った、修道院などの一部の施設にわずかに引き継がれるだけになってしまったのです。

聖書が脚光を浴びるようになったのは、宗教改革によってです。教皇の権威を否定した宗教改革者たちは、代わりに聖書の権威を謳いあげました。時を同じくして印刷機が発明され、聖書が多量に印刷されて多くの人々の手に届くようになりました。加えて、文芸復興のために熱心に古典が読まれるようになっていたことが、背景にありました。キリストの代務者としての「教皇の権威」(教皇がその座から語った言葉はキリストの代理としての言葉であり、キリストの言葉であると言う神学) を否定した、宗教改革者たちがよりどころとした聖書は、神の言葉として再確認されて多くの人々に読まれ、これをよりどころとする信仰形態が発展させられることになったのです。ここに至って、現代の私たちにも通じる、「聖書信仰」の基盤が据えられるようになりました。

伝統的なプロテスタントの聖書の読み方には、幾つかの問題点がありました。これは総じて、ギリシヤ的な物事の考え方が、聖書の読み方にまで入り込んだとことによります。宗教改革に少し先んじて起こったルネサンスは、暗黒時代のカトリック思想の束縛から、世俗的な思考をもって人間を解放する運動でした。ルネサンスの合言葉に、「ギリシヤ古典に帰れ」というものがあったように、人々はその世俗的思考の模範を、古代のギリシヤ文化に求めたのです。もともとギリシヤ思想は、その昔、軍事的覇者のローマ帝国を席巻し、後にローマ・カトリックと呼ばれたキリスト教の中にも強く流れ込みましたが、16 世紀にいたって、今度は宗教改革運動を通して、プロテスタント神学の中に入り込む機会を得たのです。宗教改革は、暗黒時代のカトリックの権威から、人々を宗教的に解放しようとした運動で、ルネサンスに相通じるところがあって、互いに学ぶところが多かったのです。

ギリシヤ的思考の特徴の一つは、非常に知的欲求が高く、自分が知りたいと願うことを知ろうとする態度です。これが聖書の学びに導入されると、神が聖書を通して教えたいと考えておられることを知ろうとする以上に、自分が知りたいと思うことを聖書から探り出そうとする傾向が強くなり、結果として、聖書が強調していることを取り扱う神学ではなく、人間の興味に応じた思弁的な神学が出来上がってしまいます。

またギリシヤ的思考には、組織的に物事を考えるという特徴もありました。これは、組

織神学という学問などに良く現れています。組織的に物事を考えるのは決して悪いことではありませんが、それが高じると、組織的に作り上げようとするあまり、聖書が語っていないことまで語る傾向があるのです。無限の神の御心を、有限な人間の思考力にあわせて、一貫性を持たせたり調和を持たせたりしながら組織的に語ろうとすると、聖書の教えと協調できなくなってしまうのです。聖書は現実の状況や問題に対応して書かれたものがほとんどで、知的に思弁的に組織的に書かれたものではないからです。特にカルビン主義の神学などを見ると、この思弁的組織的傾向の弊害が感じられます。

またプロテスタントの発祥当時は、聖書 66 巻の書物が、それぞれの事情を持つ個別の書物であると言う事実がほとんど考慮されずに、同等の権威を持つ一つの書物として扱われたということがありました。当時は聖書が書かれた時代、文化、背景、事情、文体、形式その他の諸条件を考慮できるほど学問が進んでいなかったのですから、やむを得ないことでもあったわけです。ですから、66 巻の聖書のどこからでも類似した言葉や表現や思想を自由に引用し、それらを都合が良いように巧みにつなぎ合わせて、組織的な神学が構築されたのです。時代が進み、考古学を始め様々な学問が発展すると、当然、それらの成果を取り入れ、時代背景や諸事情を考慮した聖書の読み方も現れてきましたが、現代でも、まだ、この間違った方法がかなりまかり通っています。

さらに、分析的に聖書を読むことが挙げられます。これは聖書の全体を読み取る読み方の反対です。一つの書物を一つの書物としてまとめて読み、全体の主題や前後の関係から文章や言葉を理解するよりも、言葉の意味、単語の意味一つひとつを細かく分析して定義し、読み取って行くことに力を置くやり方です。この方法は、一見とても学問的であり、緻密で正確で、言葉というものを正しく理解するのにもっとも良い方法であるかのように映ります。

しかしよく考えると、これは通常の言葉の機能というか、言葉の使用法を無視したやり方であることがわかります。言葉はもっと幅のある、ゆったりとした使われ方をするものであって、普通は、いちいち定義されることを予期して使われてはいないからです。

一つひとつの言葉の定義は非常に困難なものです。同じ単語であっても使う人によって意味が異なります。筆者は家内が蜜柑を食べながら「甘いわよ」というのを、絶対に信じません。家内の「甘い」は私の「酸っぱい」なのです。その人の教育、育った背景にもよります。また、どのような主題と趣旨のもとに使ったかによっても異なります。前後関係を良く調べなければ、定義をすることは困難です。酸っぱい夏みかんも、レモンを食べた後に食べると甘くなります。

さらに、ギリシヤ語にしてもヘブル語にしても、はなはだ不完全な言葉で、無限の神の御心の深みを表現することなど、はなから不可能なのです。その言語の意味をどれほど分析しても、始めから限界があるのです。限界があるということを理解しないで、言葉の定義にあまりにも重点を置いて学ぶと、とんでもない落とし穴に陥ります。

筆者は地方の開拓伝道に情熱を燃やしてきたドサ回りの牧師です。海外宣教師としても、未開部族の宣教に当たってきました。したがって、あまり学問をする機会はありませんでした。聖書の言語である、ヘブル語についてもアラム語についてもギリシヤ語についても、ほとんど素人の域を出ません。でも、聖書には非常に多くのレトリックが用いられていることくらいは、翻訳された聖書を読んでいても分かります。言葉遊びとでも言うべき言い回しがたくさん出てきます。特に、キリストの言葉には絶妙な言葉遊びがあると思われます。

キリストが普段用いていたのは、アラム語化したヘブル語というか、非常になまりの強いヘブル語であったようですが、それを記者たちがギリシヤ語に訳した福音書を読むと、実に豊かなレトリックに満ちています。もともとのキリストの言葉に、そのような遊びの要素が多かったのか、翻訳者たちの遊び心だったのかはさだかではありませんが、たぶん、キリストの言葉にあった遊びの心を、翻訳者たちがそこここで表現し直したのでしょう。「目の中にある梁に気付かずに」だとか、「鶏が二度鳴く前に、三度知らないと言う」などというのも、キリストご自身の言葉であると考えられます。レトリックの面白さ、あるいは効果が見事に出ています。朝早く鳴く鶏の声を聞くことがない今の日本人には、まったく分からないことでしょう。

「あなたは私を愛するか」と、三度繰り返された甦りのキリストの質問と、それに対するペテロの答えの「愛」という言葉の遊びは、果たしてアラム語やヘブル語で可能だったのでしょうか。可能だったら、キリストの真剣な遊び、不可能だったらヨハネの翻訳の妙です。

もしも、ギリシヤ語やヘブル語に、日本語のようなオノマトペ（擬音語・擬態語）があったとすると、もっともっと面白かっただろうと思ってしまいます。あるいは掛詞（かけことば）などはなかったのだろうか。母音が少ない言葉は、掛詞になりやすいけれど、ギリシヤ語もヘブル語も、母音が多いほうではないなどと考えてしまいます。掛詞というのは、「何々とかけて、何と解く」というあれです。落語の落ちはほとんど掛詞です。親父ギャグの多くは掛詞です。川柳も掛詞で持っています。筆者は中学生のころ、かぐや姫の中の「年を経て浪立ち寄らぬ住の江のまつかひなしと聞くはまことか」という歌の、二重の掛詞にえらく感動したものです。

英語には母音が多すぎて掛詞はちょっと無理なようですが、ライムという言葉遊びがあります。やはり、発音とリズムが似ている言葉を幾つか重ねて強調したり、遊んだりするわけです。ただ、西欧で発展した聖書の学びを読むと、このような言葉の遊びについての理解が非常に薄いように感じます。とくに、福音派の人たちは聖書の字義通りの解釈にこだわるあまり、遊びを理解しないように思われます。しばらくの間、「エルサレムの城壁には、針の目と呼ばれる小さな門があって、そこを駱駝が通るのは非常に難しかった」などという、まことしやかな解説がまかり通っていたことがあります。あるイギリスの牧師がそのような出鱈目を言ったのが、たちまちのうちに広まったらしいのですが、レトリックを理解しないで、無理やりに「字義通り」の解釈をしようとした珍例です。

言葉遊びの例でも分かるように、言葉というものは、科学や法律や医学あるいは論文と言った特殊な分野ならばいざ知らず、通常使われる範囲ではかなり融通の利くゆったりしたものです。それぞれの言葉の定義はあるにはあるが、その文体、状況、前後関係によって、ずいぶん意味が変わるものです。一つひとつの言葉の定義も大切ですが、どのような文体の中で、どのような状況で、どのような前後関係でその言葉が使われているか、しっかりと考慮しなければなりません。そのような、大枠で全体を捉え、始めから細部の分析などにはあまり囚われないという努力が、西欧の聖書の読み方には欠けているように思われるのです。

大枠を捉える前に一つの言葉や表現に囚われてしまった聖書解釈の誤りで、私たちの間で一般的な例を幾つか取り上げてみましょう。(筆者も言葉遊びをしています) 聖餐式のとき、私たちの教会の大部分は、未信者が聖餐に与ることを極端に恐れています。たとえクリスチャンであっても他の教会の信徒には授けないという、「清廉潔白さ」を誇る教会もたくさんあります。未信者に聖餐を授けたかどで、所属の団体から処分を受け、追放された牧師もいます。礼拝会で、未信者には聖餐を与えないことによって、信徒とそうでない者の間に差別をつけることにならないために、聖餐式をしないという牧師もいます。

これは、ここで使われている「主の体」という言葉の定義によります。その定義を間違いのないものにするのは、「体」という言葉の細密な研究ではなく前後関係からの判断です。あの一区切りの文章を通常の感覚で読むと、パウロが憤って厳しい裁きの宣告をしているのは、未信者が聖餐にあずかることに関してではないことが明らかです。パウロの憤慨のもとは、教会の中の貧しいものが辱められていること、公然と差別が行われ、容認され、放っておかれていることです。教会の愛の象徴として、互いに持ち寄った食べ物を分け合うべき愛餐会で、金持ちたちはさっさと持って来た贅沢な食べ物を食べ始め、早くも酔っ払ってしまう者さえ出ているのに、その傍らでは、貧しい者が何も食べるものがないまま

に残されて、卑しめられていたという事実に、パウロは烈火のごとく怒っているのです。それなのに、あの部分を引用して、未信者に聖餐を施してはならないと論じるのはまったくの誤りで、聖書がなかったカトリック教会の、化体説（聖餐のパンとぶどう酒は、司祭の祝福の祈りを通し、文字通り、キリストの体と血に変化するという説）の魔術的誤りをそのまま引き継いでしまい、聖書の解釈まで曲げてしまったということです。

　このような誤りは、一般の書物の読み方、たとえば、小説の読み方、歴史の読み方、あるいは手紙の読み方でもありえない、起こりえない誤りです。これは、言葉の厳密な定義というものに固執するあまり、細部ばかりが気になって、全体を見渡すことができなくなっている、西欧神学の欠点の良い例です。そしてその西欧神学の誤りを長い年月正せないままでいる、西欧化した日本の牧師や神学者の欠点の良い例です。

　私たちの仲間の間にも間違いがあることを、例を挙げて説明しておきましょう。これは分析型の読み方をする西欧神学の欠点が、カルビン神学だけでなく、ウエスレー系の神学にも入っていることを示すものです。キリストは聖霊と火によって私たちをバプタイズしてくださると教えておられていますが、ウエスレー系ホーリネスの流れを汲む私たちは、これを「聖霊による聖め」のバプテスマと理解しています。「聖霊＝火＝聖め」という連想による理解ですが、これも、聖霊、火、聖めという言葉に固執して、その教え全体の前後関係を忘れた読み方をした結果、陥った誤りです。前後関係に注意をしながら読むと、というより、ごく普通の読み方をすると、この火が「裁き」であることは火を見るよりも明らかです。

　私たちはいま、日本に住み日本人に福音を語ろうとしている者として、日本人的なもっと緩やかな、大まかな言葉の意味を大切にする読み方で聖書を読み直し、日本人に理解されやすく受け入れられやすい、福音の提示の仕方を探るべきなのです。

Ⅳ.　２１世紀の日本人のための神学

　このように細部の解釈に力を注ぐ西欧神学には、聖書を全体的に見渡す努力、あるいは聖書全巻を鳥瞰図のように見るという、努力が欠けていることが分かりました。それは、神の救いの歴史という大河を見失って、小川やせせらぎや湧き水の美しさに、目を奪われているようなものです。聖書はそれぞれ独立した書物、あるいは直接的には何のかかわりもない書物を集めたものに過ぎません。しかし、そこには聖書を与えてくださった神の、一貫した意図があったと考えるのが私たちの立場です。つまり、創世記を書かせてくださったときの神は、黙示録を御心の中に置きながら書かせてくださったということです。そ

の神はまた、ユダヤ・グレコローマンの文化に生きる人たちには、彼らに理解でき、彼らに受け入れられる福音解釈が必要であることをご存知だったし、21 世紀に生きる私たちが、21 世紀の異邦人世界のために、神学を構築しなければならないこともご存知だったはずです。

ただし、私たちが構築しなければならないその神学は、パウロがやり遂げたように、あくまでも霊感された神の言葉である、旧新約聖書の正しい解釈と理解の下に行われなければならないものです。パウロは異邦人も信仰によって義とされると説いたとき、アブラハムが行いによらず信仰によって義とされたという、創世記の記述を取り上げて語りました。パウロは、この点を説明するのに、神がイスラエル人に与えた律法も預言書も詩篇も用いることができませんでした。イスラエル民族が、民族として発祥する前に戻らなければならなかったのです。

創世記もイスラエル民族に与えられたものであるとはいえ、そこには、イスラエル民族の枠に収まらない出来事と、イスラエル民族の枠に入りきれない、全世界に対する神のみ心の啓示が記されている特殊な書物です。そこには、神の選民であるイスラエルに対する神の御心以上のものが、隠されているのです。創世記を書かせてくださった聖霊の啓示によって、パウロはそれを探り出したのです。

パウロの議論は、異邦人クリスチャンの増加という当時の必要性に駆られたもので、神の義認を受けるのは、律法の行いによるのか信仰によるのかということでした。この議論を進めるために、パウロはアブラハムまで遡りました。ユダヤ人たちを直接の対象として与えられた律法によっては、議論を支えることができずに、律法以前にたどり着いたのです。日本という土地で、日本人を対象に宣教の業を進めている私たちが今必要としている議論は、「日本人が救われるためには、キリストの贖いについて知らなければならないか」ということです。キリストとその生涯、十字架、贖い、死、甦り、悔い改めなどについて正しい知識を持っていなければ、異邦人である日本人は救われないのかということです。

アブラハムが救われたのは、キリストの十字架の贖いがあったからです。キリストが誕生する 2000 年ほども前のことですが、キリストの十字架の贖いの働きは、すでに、神の御心の中で決定され、完成されていたのです。そのキリストの贖いのみ業があったからこそ、アブラハムは信仰によって義とされ、救いを得ることができたのです。ただし、アブラハム自身はキリストについてはまったく知りませんでした。十字架や甦りだけではなく、その誕生についてさえ、まったくと言ってよいほど知らなかったはずです。それなのに、アブラハムはキリストの贖いのゆえに、信仰によって救いを得ることができたのです。アブラハムだけではなく、旧約時代に生きたすべての神の人は、みな、キリストの十字架のゆ

えに、キリストの十字架を知らないままで救いを得たのです。

パウロの時代の異邦人たちも、ごくわずかの旧約聖書の知識と、これもまた限られた範囲のキリストの生涯と働きについての知識だけで、信仰によって救われました。パウロの時代の後、教父時代の異邦人たちも、さらに少ない旧約聖書についての知識とキリストの働きについての知識で、信仰によって救われました。このときの異邦人たちの信仰とはいったいどのような性質の信仰だったのでしょう。旧約聖書を手に入れることは非常に難しく、新約聖書も断片としてしか手に入れることができなかったのです。当時の宣教においては、キリストの贖いの働きに関して、かなりの説明と理解が伴っていたと見ることができるとはいえ、現代の私たちのものとは雲泥の差がありました。さらに時代が移って、カトリックの時代になると、信仰による救いはどうなっていったのでしょう。もしも、救いには現代のプロテスタント諸教会が要求しているような、キリストとその働きに関する知識が求められていたとするなら、当時の人たちの大多数は救われていなかったはずです。

アブラハムが義とされた物語でも分かるように、神がお求めになったのは、キリストとその働きに対する正確な理解ではなく、神に対する単純な信頼、すなわち信仰でした。アブラハムは自分の罪も自覚していませんでした。救いが必要だとも、義とされなければならないとも感じていなかったはずです。そもそも、彼の信頼は彼の義とか救いとか言うものとはまったく関わりのない、年老いてから子どもを与えられるかどうかという問題で、神の言葉を信用したものだったのです。彼の、救いとか永遠のいのちとか罪の許しとかとはまったく関係がない、神への単純な信頼をもって、神はアブラハムのすべてを、キリストにあって受け入れてくださったのです。

アブラハムの神理解にしても、知的理解としては、まだまだ低いものでした。アブラハムは誰よりも神を知っていたのですが、その知識は、神学書を漁って得るようなものではなく、幼子が母親や父親を良く知っているような意味での知識でした。では、現在の日本人は、アブラハムのように、信仰によって救われることができないのでしょうか。キリストの生涯と働きを、洗礼志願者テストで 60 点以上取るだけ理解していなければ、救われないのでしょうか。罪を自覚して、悔い改めをしなければ救われないのでしょうか。キリストとその働きについての知識を要求し、悔い改めを必須と考える信仰は、少なくてもアブラハムの信仰とは異なります。それは、聖書の基本と異なるということです。

パウロは律法を厳しく守る信仰から、神に対する信頼を第一にする信仰へと移りました。イスラエル民族に与えられた律法を、「救いのための条件」という概念から締め出したのです。今、私たちは、新約聖書で教えられたキリストの生涯と働きについての知識を、「救いのための条件」という概念からはずさなければならないのです。

パウロはすでに、異邦人たちにいきなりキリストとその働きについて語り、説得することの難しさに直面していました。「キリストとその十字架以外には何も知ろうとは思わない」と宣言した彼でしたが、アテネにおいて完全な異邦人に語ったときは、少なくてもキリストとその十字架から始めることはしないで、天地を造り、人間を造り、人間をいつくしみ、育んでくださる神から始めています。明らかに、メッセージの始めの部分の、接点が変わっているのです。（使徒 17：16－31）

またパウロはこのとき、偶像礼拝が蔓延していることに腹立ちを覚えたようですが、ユダヤ人に対するように、あるいはクリスチャンに対するように、偶像礼拝の罪を責め立ててはいません。むしろ、偶像礼拝であろうがなんであろうが、神を礼拝したいという人間の本能的欲求を認めて、それを大切なものとして受け入れ、神を礼拝するという共通点から話を進めようとしています。そして「神はそのような無知の時代を見過ごしてこられたが、いまはすべての人に悔い改めを命じておられる」と語っています。偶像礼拝が罪であることは明らかです。とはいえ異邦人の偶像礼拝は、パウロによると、神が忍耐と寛容をもって見過ごしてくることができた罪です。ただ、パウロがアテネで宣教をしたことによって、それを聞いた異邦人には悔い改めが命じられる、「今」という時になったのです。

この「悔い改め」という言葉には、特別な注意が必要です。この言葉は当時、ユダヤ人やクリスチャンたちの間では、すでに「悔い改め」という意味で用いられていましたが、一般のギリシヤ人の間では、まだもともとの「考えを変える」という意味で用いられているだけで、「悔い改め」ほど、罪と関わる強い言葉とはなっていなかったと思われるのです。ですから、パウロはここで旧約聖書の枠外にいた異邦人へ向けて、偶像礼拝の罪を悔い改めよと、火の出るような激しい説教をしたのではなく、「知らない神へという祭壇まで築くほど熱心な宗教心は見上げたものであるが、偶像のようなものを神とする考え方を変え、天地の創造者である神を信じてはどうか。今がそのときではないか」と、語りかけたのだと判断されます。ただし、偶像礼拝をしていたのがユダヤ人であったならば、パウロの説教は、このような穏やかなものではあり得なかったはずです。

とにかくパウロは、このように福音の新しい理解をもって、新しく開けた宣教の可能性に挑みました。ユダヤ民族に限られた旧約聖書の部分を離れて、より普遍的な人類全体に関わる旧約聖書の部分まで遡り、全人類を対象とした神の救いのご計画に思いを馳せたのです。神はユダヤ民族を特別な契約の民として、神の救いを世界の民族にもたらす器として、特殊な扱い方をなさいました。先に触れた偶像礼拝の厳しい禁止もその一つです。それから神の聖さを教え人間の罪の自覚を促す、律法の付与もその一つです。それを直接異邦人に当てはめるのは間違っているのです。

神に選び出されたユダヤ民族は、当然、民族的優越感を抱くようになりました。自分たちが他の民族に比べてことさら善良であり、また優れているために、神の祝福と救いに選ばれることになったと判断したのです。そのような故なき優越感はだんだん増幅して、やがて、異邦人が救われるためにはユダヤ人にならなければならないと、信じ込むことにもなりました。ところが神は、ユダヤ民族も罪人に過ぎず、祝福を受けるにも救われるにも、ただ神の哀れみに頼る以外にはないことを、教えようとされたのです。それが律法の付与の主な理由です。

神はユダヤ民族が優れているからではなく、罪を自覚させ、悔い改めなければならないことを教えるために、律法をお与えになったのです。ユダヤ人対しては、非常に厳しく罪が指摘され責められているのは、そのためなのです。旧約聖書を読んでも、果たして何が神に対する決定的な罪なのか、はっきりしません。しいて突き詰めると、心を尽くし精神を尽くし、思いを尽くして神を愛さないことが、最大の罪であり、何か、悪を行うということではないのです。言い換えると、罪の自覚は、神の前に誇るべきものがあると感じていた、ユダヤ人に対して求められたものであり、律法は罪の自覚に至らせる養育係として与えられたのです。

異邦人たちに罪はなかったとか、罪の自覚は不要だとか言おうとしているのではありません。ユダヤ民族に求められているような意味での、罪の自覚は不要だと判断しているのです。異邦人の罪は、パウロの言葉によると、被造物を通して明らかに知ることができる神の目に見えない本性、神の永遠の力と神性を認めずに、偶像礼拝に走ったことにあるのです。（ローマ　1：18－23）　ユダヤ民族の罪は、神がしるしと奇跡をもって明らかにご自分を現して、ユダヤ民族はご自分の民であるとおっしゃり、ご自分はユダヤ民族の神であると宣言して、あたかも夫と妻との間柄のように、特別な関係になったとおっしゃってくださったにもかかわらず、偶像礼拝に陥り、姦淫の罪を犯し続けたところにあり、性質がまったく異なります。

異邦人は、イスラエル民族が体験したような神の自己顕現を見ませんでした。律法も与えられていません。イスラエル民族のような民族的誇りは、神のみ前に待ち合わせていないのです。したがって異邦人に対する宣教は、偶像礼拝から責め立てて悔い改めを促すようなものではなく、まず、神の姿を明らかに示すことから始まらなければならないわけです。そして、パウロはそのようにして異邦人の伝道を試みています。偶像礼拝を非難して喧嘩腰で伝道を始めるのではなく、たとえ偶像礼拝ではあっても、それが、人間の本能的欲求である宗教心の発露であることを認め、かえって強い宗教心を持っていることを賞賛するところから話し始めているのです。それから、彼らが知らずに拝んでいるその神につ

いて語ろうと、話のきっかけを作っているのです。

ユダヤ人ではない人々に福音を語ろうとするとき、ユダヤ民族に与えられた聖書の律法を振り回し、ユダヤ人が持たなければならなかったと同じ罪意識を持たせようとするのは、大きな間違いです。私たちは、異邦人が犯しているもっと本質的な罪について、しっかりと語るべきなのです。それは神を神として崇めず、充分な感謝もしていないという事実であり、神に造られたものなのに、神に喜ばれる生活をしようという努力もしていないということです。（ローマ 1：18－25）

つまり、出エジプト記から始まるユダヤ人向けの聖書の教えによる伝道ではなく、全人類的な広がりを持つ、創世記の教えからの伝道が試みられなければならないのです。創世記で明らかなことは、神が天地を良いものとして創造し、その中に人間を造って生かしてくださったという事実です。人間は神の愛の対象として造られ、神の愛を満喫しながら生きるべきもの、互いに愛し合いながら生きるべきものとして造られたのです。本来人間は自分を造ってくださった神に感謝と喜びを捧げ、神がお造りになった自然の中でおおらかに生きるべきものだったのです。

ところが罪のために神との交わりから絶たれ、人間は神を慕い礼拝し賛美する本能的欲求を充分に発揮することができなくなり、人間としての喜び、充実感を味わうことができなくなってしまいました。まさに、空の空となったのです。神を離れたところで家庭を作り、社会を築き上げた人間は、神の御姿をだんだん忘れてしまいました。神を離れ、悪魔に支配される、罪の文化が形成されていったのです。

人間の罪に関しては、昔から原罪という教理が教えられて、あたかも遺伝のよう、人間の血に流れている罪の性質であると説明されて来たものですが、それは聖書に教えられていることではなく、むしろ聖書の教えとはまったく異なったものです。聖書によるならば、すべての人間は神から離され、神との交わりを絶たれ、神の命から切り離されて、悪魔が支配する社会で、悪魔の力の下に悪魔の子として生まれたのです。それで罪を犯さずには生きていけないのです。聖書が教える「より根源的な罪」は、神を神として認めず、感謝もせず、崇めもしていないことです。偶像礼拝の一歩手前の状態です。

筆者は、偶像礼拝の一歩手前に踏みとどまっている日本人について、いくどか書いています。日本人の大部分は、仏教の偶像礼拝の影響を受けながらも、日本人本来の神道的な感覚をしっかりと持ち続け——神道ではなく、神道的な感覚———偶像礼拝に陥りきっていないのです。しかも、神がどのようなお方であるかは知らないまま、その知らない神を敢えて知らないままにしておいて、感謝を捧げ、生かされている喜びを歌い、様々な祭り

などで表現しています。

日本人は、自分たちが本能的に感じている神を無理に説明しようとして、次元の低い多神教の神々にしてしまうことを恐れているのです。日本人は八百万の神々を信じていると言われていますが、それは日本人の宗教心の表層的な理解で、本当は唯一絶対の神を信じていると言ったほうが、真実に近いのです。(後述) つまり日本人は、パウロが語った、「神を人や獣や鳥や這うものの像にしてしまう愚かさ」までは堕落していないのです。異教徒である日本人が、どのようなキリスト教国にも負けない、高い倫理を守り通し、豊かさを保っているのは、偶像礼拝に対する神の刑罰をあまり受けていないからであると、筆者はひそかに信じています。(ローマ１：24－32)

日本人に必要な福音は、キリストが人間の罪のために十字架に架かって、贖いを完成してくださったという事実ではありません。キリストが十字架に架かって罪の贖いの働きを完成してくださった事実を、日本人が確かに福音であると理解し、感じるためには、まず、日本人が罪の自覚を持たなければなりません。ただしキリストは、ユダヤ人に罪を自覚させようとしてかなわず、結果として民衆の憤りを買い、死刑に処せられたことを知らなければなりません。そのユダヤ人は、神からの律法を持っていたのです。神からの律法を持っていない日本人も、ユダヤ人が自覚しなければならなかったように、罪の自覚を持たなければならないのでしょうか。果たしてそれは可能でしょうか。

旧約聖書を持たなかった日本人が罪の自覚を持つのは、ユダヤ人にも増して難しいことに違いありません。日本人に向けて神の聖さ、罪に対する怒りなどを語ることが有益でしょうか。キリストがユダヤ人に持たせようとして実現しなかった罪の自覚を、ユダヤ人に対するのと同じような方法で、日本人に持たせるのは不可能です。

キリストが、罪の生贄として十字架についてくださったことに、誤りはありません。それは隠す必要がないことです。でも、伝道のしょっぱなに持ってくる必要性があるのでしょうか。伝道の最初に持ってくるべきことは、神が人間を愛し、人間の幸せを願い、人間が住むべき最高の環境である自然を準備し、人の必要をすべて満たそうとしておられると言う事実です。人間は神から離れて、神を忘れた社会を作り、神を無視した生き方をしてきたけれど、神は、人間を見捨てることなく、誠実に人間を愛し続け、助け、守り通しておられるという事実です。たとえ人間が神の怒りを呼ぶような生き方をしても、神は人間を見限らず、何とか救おうとしておられるという事実です。

私たち人間はこの神に感謝し、この神の愛、哀れみ、善意、そして力を信頼して、この神に喜ばれる生き方をすればよいのです。そうすると、神は喜んでその人を受け入れ、こ

れまで以上にその人を愛し、助け、その人のためにあらゆる良いことをしてくださるのです。その上、その人が知らないうちに、神はその人を信仰のゆえに義人と認めてくださるのです。キリストの贖いのゆえに救いに入れてくださるのです。

日本人に必要な福音は、西欧キリスト教が理解したユダヤ民族的な福音ではなく、パウロの理解したユダヤ・グレコローマンの文化に生きる人々に向けての福音でもなく、それらを超えたところにある、あるいはそれらの前提としてある、神の全人類に対する普遍的な愛、恵み、哀れみ、誠実さに対する信頼を基盤とした福音です。

V．日本人へのアプローチ

繰り返しますが、日本人に対してはキリストについて語る必要がないと言っているのではありません。十字架について話さないで良いと主張しているのでもありません。人間の罪とキリストの贖いの死について、黙っていなければならないと言っているのでもありません。それらはすべて必要であり、重要であり、絶対に欠かせてはならない、福音の柱です。

しかし日本人の救いは、そのような事柄についての「知識」によるのではないのです。信仰はあくまでも神に対する「信頼」です。神に頼ることです。また、神に感謝し、賛美し、神に造られた自然の中で、思い煩わず、おおらかに生きることです。たとえキリストについては知らなくても、たとえ十字架についても、贖いについても悔い改めについても知らないままでも、さらに極端を恐れずに言うならば、神の名さえも確かには知らなくても、天地を造り、人間をお造りになったお方に感謝をし、賛美をし、信頼しながら生きるならば、それでいいのです。もっと言えば、この神が天地をお造りになった神であるとは明確に知らなくてもいいのです。人間をお造りになった神であることさえ知らなくても良いはずです。

極めて基本的な信仰形態でいいのです。すなわち、人間として、自分が感じる神の意識を認め、理屈を超えたその神が私たちを慈しみ、守り、必要を満たし、支えてくださっていると感じて、まさに直感的に感じて、あるいはパウロが言うように、被造物を通して、すなわち自然を通して感じて、感謝し、賛美し、信頼して生きればいいのです。パウロはまた、律法を持たない異邦人たちが持っている良心を大切なものとして認めています。（ローマ 2：14－15）私たちは自分のうちにある良心よりも、自分たちの神意識、本能的神意識のほうが、さらに重要であることに気付くべきです。人間の人間たるゆえんは、神意識を持っていることであり、それこそ、神に似せて霊的存在として造られている、根源的人間性であり、パウロが言う「心に記されている律法」であると理解できます。良心もそこ

から発生しているのです。

日本人は、その神意識を様々な形で表現してきました。その中には、たくさんの誤りや間違い、あるいは勘違いもありました。それは、罪によって神との交わりを絶たれた、神なしの社会の中で生まれ、生き、文化を形成し、歴史を作ってきた人間には当然のことです。それでも、それらの間違いと誤りの塵芥（ちりあくた）の中に、輝く宝の原石を見ることができるのです。日本人は、パウロが対面したアテネの人々が「知らずに拝んで」きた神よりも、聖書の神の姿に近い神を拝んできました。今も、拝んでいます。その神について私たちは、「あなたがたが拝んできた神について語りましょう」と、パウロのように語ることができるはずです。

思考的で議論好きなギリシヤ人たちも、自分たちの理解に限界があることを感じて、知られない神の存在を認めていました。日本人はギリシヤ人のように思考的でも議論好きでもありません。ですから、神に関してあまり深く考えることはしません。反って超絶した存在者であると本能的に感じているお方を、人間の有限な思索で有限の世界に引き下ろすのは良くないと感じ、分からないままにそっとしておくことを選んだのです。「触らぬ神に祟りなし」ということわざは、宗教にはまり込むと怖いから、離れていなさいという現代的な意味よりも、「神は畏れおおい方だから、こねくり回してはいけないよ。尊んで、そっとして置きなさい」という意味であるはずです。

日本人は神について説明しません。説明するのは神に対する不敬であるかのように嫌います。説明できないと考えています。神を畏れる心が、ただ静かに頭を下げさせるのです。幸い、いろいろと考えさせ、模索させてくれる宗教である仏教が身近にありますので、思索はそちらに任せてしまえるのです。仏教も日本に馴染んだ宗教であって、哲学的であり処世術的であって、いろいろと考えるには適しています。ただ仏教は、日本人の心の奥にある深遠・悠遠・幽遠な宗教観とは、紙一重で異なるものです。仏教は積極的に日本古来の神道と融和しようと努力して、ある程度は成功してきました。でもやはり多くの日本人は、仏教を良く整えられた奥深い処世術、処世訓、あるいは死者に関するまつりごととして捉えるだけです。自分の体験や思索をそこに乗せ、加えていきながらも、宗教心に関しては神道の悠遠さには及ばないと感じて、仏教の思索を神道に移行させることを拒んでいるのです。

そのような日本人の宗教観、神観に対して、西欧から入ってきたキリスト教は、無限の神、全知全能の神を信じるといいながら、その神を、まるでこざかしい思索で弄（もてあそ）ぶかのように説明しようとするのです。日本人が大切にしてきた神観を、そのようにして壊してしまうわけです。本来、聖書の神は組織神学で説明されるような形ではご自分

を現しておられません。むしろ見えない方、人間の思索の及ばない方として存在しておられ、日本人が本能的に感じてきた神観に近いと思われるのです。

曖昧で、霞の中で見るほどにも見えないかもしれませんが、一般的日本人は、昔から神について幾つかの共通観念をもっていました。それらの共通観念はまた、聖書の神観とも共通するもので、私たちはそれらのことから話し出すと、共感をもって共通の土俵に立って話を進めることができるのです。福音を日本人にも福音として聞いてもらうためには、まず、そのような共感を得て行うのがふさわしいのです。

優しい神

日本人が感じている神は、基本的に優しい神です。時には地震や嵐や洪水で「あらぶる神」とも思われていますが、日本人が本当の意味で神と感じているのは優しい神で、人間の幸せを願っている神です。自然の中に神を見ている日本人は、優しい神が自然災害をもたらす事を受け入れることができず、あらぶる神という別の神さえも想定します。聖書の世界観からこれを見ると、悪魔や悪霊に属するものです。聖書では神と悪魔とはまったく異なった存在で、決して混同できませんが、霊的に盲目の状態にいる日本人にとっては、目に見えない霊的な存在者として、多神論的に捉えたとしても不思議ではありません。

私たちキリスト教徒にとっては、神とは天地を創造してくださった方だけであり、あとはみ使や悪魔や悪霊と呼ばれる霊的存在者たちがいるということで、霊的世界の大体の整理、区分けができているのです。もっとしっかりと区分けをすると、神とはすべての存在物の創造者であり、他のものは何と呼ばれようと被造物に過ぎず、神だけがまったくの別格なのです。ところが日本人には、この区分けができておらず、人間より少しだけ力の強い存在はみな神になることができ、特に目に見えない力は、容易に神と認められるのです。したがって、すぐにでも多神論になってしまうのです。

もともと「神」という日本語は、「上」という意味の「かみ」からきたもので、人間よりいくらかでも力のある存在を指したにすぎません。そのうえ日本語では、単数と複数の区別が厳格ではありません。「良い神」悪い神」という概念があってもおかしくないのです。聖書が教える全知全能の神も、御使いも悪魔も悪霊も、日本語的にはみな神に属するのです。日本語から理解すると、聖書の世界は当然多神教の世界になります。それにもかかわらず、日本人の神観念は驚くほど、一神教に近いのです。あらぶる神は、気高く尊く、優しく大きくいつくしみに満ちている神と、同列同等の存在とは認められていないのです。

本当のところ、日本人の世界観は聖書の世界観とあまりかけ離れてはいません。基本的

にアニミズムの世界なのです。この世界は、物質でできていて時間と空間によって制限されている私たちの世界と、目には見えず手で触れることもできない、また、たぶん時間と空間にも制限されていない霊の世界によってできていて、それらの二つの世界がいつも混じりあいながら持続しているのです。聖書で教えられているほど整理はされていませんが、日本人も、万物の中に存在しておられる絶対に貴い神と、私たちの周囲にいていつも私たちに悪さをしている怨霊とか死霊とか、悪霊とか幽霊、あるいは妖怪と言うものを感じながら生きています。信じているとはいえないかもしれませんが、感じているのです。

日本人が怨霊の祟りだとか、呪いだとかを恐れて騒ぐとき、私たちはそれを迷信だ、非科学的だといって否定したり退けたりする必要はありません。それらを嘲笑するのは、聖書の教えに立つクリスチャンではありません。反って啓蒙思想と合理主義に毒された自然科学を崇拝する、間違ったクリスチャンの態度です。近・現代の西欧プロテスタントキリスト教の多くは、多かれ少なかれ啓蒙主義と合理主義の洗礼を受けたキリスト教で、一般的な日本人の「迷信」を嘲笑するだけで、彼らの悩みや問題や疑問に共感するところが欠けています。迷信に乗る必要はありませんが、聖書の世界もアニミズムの世界であることを認めて、多くの日本人と共感をもって話をすることです。私たちが崇める優しい神がおられて、その神に仕える善良な霊もいる。ところが、私たちが崇める優しい神よりは弱くても、物凄い力をもっている悪魔と呼ばれる「この世の神」がいて、その手下の数多くの悪霊どもを使って、人間を不幸に陥れようとあらゆる悪さをしている。これが単純化された聖書の世界なのです。そのような世界で私たちは、自分の信頼する優しい神が、天地をお造りになった神であり、無限の力と無限の知識をもって、最終的に世界を治めておられると信じて疑わないのです。だから、私たちには平安があるのです。

日本人に私たちの神について語るとき、日本人の神観や宗教観あるいは世界観を、否定するところから始める必要はありません。たとえ仏教徒だと自認している日本人であっても、ほとんどの日本人は、本能的に神道的神観を共有しているのです。その本能的神観を認めてあげ、アニミズムの世界観を認めてあげればいいのです。日本語で神と呼ばれるありとあらゆる存在を認め、その中で日本人が本当にありがたいと思い、思わず頭を下げ、手をあわせたくなる神は、私たちクリスチャンが信頼している神と同じで、天と地を造り、人間を造り、人間を愛し、すべての良いもので祝福してくださっている神ですと、お話しすれば良いのです。この神の愛と、善良さ、誠実さ、恵み、優しさ、寛容さに信頼して生き、すべての良いものを与えてくださっていることを感謝し、生かされていることを感謝し、守られていることを感謝しながら生きることこそ、人間としての努めであることを語ればいいのです。

人間社会に様々な不幸があり、悲劇があるのは、神が人間を憎んでいるからではなく、人間の罪が神の祝福と助けを妨げているという事実もお話してあげましょう。罪というのは、泥棒をしたり殺したりと言う罪よりも、その根本に、神を神として崇めず、感謝もせず、神に喜ばれる生き方もしていないことであると、教えてあげましょう。そして、私たちは親不孝よりももっと大きな不義理、神不孝をくり返してきたことを認めて、改めるように勧めればよいのです。

唯一の神

日本人は、非常に強い一神教的感覚を持っています。確かに日本語で神と言うとき、ありとあらゆる霊的な存在、あるいは人間より少しだけ力が強い存在を含みます。多くの日本人が無神論者を自認するのは、八百万の神々に代表されるこれらの多神教の神々を、あまりにも幼稚でばかばかしいものと感じて否定し、その勢いで、つい、「神などいない」と言って、言葉の上では、自分の中にある本能的神意識まで捨ててしまうのです。英語で言う、たらいの水といっしょに赤ちゃんまで流してしまうことになるわけです。でも、赤ちゃんを流してはいけないとも感じるため、無神論者を自認しながらも、宗教それ自体、あるいは信仰心それ自体を貶（けな）すことはまずないのです。

日本人は、いかなる謂（いわ）れと歴史を持つ神社に行っても、あるいはどのような神を祀っている神社に行っても、そこで祀られている神の名を呼んで拝むことはまれです。本当のところ、そこで祀られている神が誰であるかなど、気にもとめません。それらの神の背後にいらっしゃるもっと大きく、気高く、尊く、賢く、目に見えない方を感じて、その方を礼拝しようとしているからです。八幡様に行っても、天神様にお参りしても、春日様に詣でても、あるいは伊勢の神宮に参拝しても、まったく変わらない気持ちで、同じ目に見えない賢い方を拝むのです。つまり、他の神々、多神論的神々とは別格の、唯一の神を感じて、その方を拝み、その方に感謝を捧げようとしているのです。ただ、その方の名前も分からないし、姿も分からない。あまりにも気高く彼方にいらっしゃる方なのです。畏れ多くて、その方についてあれこれ詮索することさえ、憚（はばか）られるために、そっと分からないままにしておくのです。日本人が、本能的に感じ大切にしてきたこの尊い方こそ、私たちクリスチャンが信頼している神なのです。

さらに日本人は、心の奥深くで本能的に感じているこの尊いお方を、「神」と呼ぶことさえはばかります。通俗の神々と混同させたくないからです。なんとお呼びしたら良いかわからずに、密かに崇め、尊び、畏れ、感謝を捧げているのです。ただ、呼び方がわからないために、とりあえず「神」と言ってしまうこともあるだけです。昔から伝えられている「なにごとかおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」という歌が、大多数

の日本人の感覚を表現したものと言えます。かたじけなさに涙がこぼれる、「名も知られていないお方」こそ、聖書が教える天地をお造りになった方なのです。

「神」という言葉の問題は、実は聖書の中にもあるのです。天地をお造りになった方は、ご自分を人間に現わしてくださったとき、当然、当時の人々が用いていた「神」という言葉を用いなければなりませんでした。しかもたくさんあったであろう「神」を意味する言葉から、最もふさわしいものを選び出して用いなければなりませんでした。それでもその言葉には、天地をお造りになったお方を表現するにはふさわしくない意味が付着していました。ですから、「私は神である」といって人間に現れてくださっただけでは、人間が正しく神を理解することはでず、当時の人々が拝んでいた神々を思い起こすだけだったのです。「私は・・・・・の神である」といういい方も、まだまだ不十分でした。

そこで用いられたのが、天地創造の物語でした。神はご自分がほかのすべての神々とは異なる神、次元の異なる神であること、さらに唯一の神であることを示すために、自分は天地を創造した神であると自己紹介をしてくださったのです。イスラエル人たちは、この神の自己紹介を通して、初めて、本当の神の姿を、おぼろげながらも理解したのです。それでも、神が唯一の方であると一般の人たちに理解されるまでは、千年ほどもかかっているのです。新約聖書ではギリシヤ語が用いられましたが、当然、そこにも同様な問題がありました。ただ幸いなことに、すでに旧約聖書のヘブル語で説明された神の理解が、多くの人々に理解されていたために、ギリシヤ語の「神」に、比較的容易に、天地を創造された神という概念を含ませることができたのです。

日本人が、「神」という言葉で表現しなければならない私たちの神を、正しく理解できないのは当然であり、軽々しく責められるものではありません。ゆっくりと時間をかけて、より正しい理解に進んでもらえるように、忍耐深く努力しなければならないのです。

罪・悔い改め・信仰

西欧プロテスタントの罪の指摘は、まったく的外れです。罪とはギリシヤ語で的外れを意味するとのことですが、まさに的外れなのです。旧約聖書の律法の罪を日本人にそのまま当てはめて、罪を指摘しようとするから的外れになるのです。その中でも一番の的外れが、偶像礼拝の糾弾であるわけです。

日本人は、罪についても、おぼろげながらも本能的に感じています。それは、神道的感覚の中にも禊（みそぎ）があったり、流し雛があったりすることにも現れています。ある

いは、仏教的な言葉ではありますが、「ありがとう」という美しい日本語にも現れています。ありがとうとは、「あってはならないことです」と言う意味です。「私のようなものが受けるには過分なお取り扱いです」、「私は受けるにふさわしくない者です。それなのに・・・・・」という感覚です。「かたじけない」という言葉にも、同様な感覚があります。大きく、恵み豊かで、清らかで、尊い方を感じると、畏れ多くなり、「ありがとうございます」、「かたじけのうございます」と頭を垂れ、このままではその前に出ることはできないと感じ、手を洗い口を濯ぎ、いくらかでも清くなろうとするのです。

このような日本人の感覚は、罪というより、穢れに近いものです。罪という、具体的な悪や犯罪を思わせるものではなく、自分は聖く大きな方にはふさわしくないという、漠然とした、もっと根源的な畏れです。目に見えない尊い方に、積極的にまた意識的に何か悪いことをしたという記憶はないけれど、自分がその方の前に出るには何かが足りない、何かがかけている、何かが合わない、しっくりしない、どこかで何か良くないことをしているかもしれないという慄（おのの）きです。ヨブが自分の息子娘全員のために、それぞれ全焼のいけにえをささげたのと、似た感覚かも知れません。ただヨブの場合は、いけにえをささげる対象である神を良く知っていたことが違います。

私たちは普通の日本人が持ち合わせている、この穢れの意識、日本人的罪悪感を大切にして、神の聖さの前に罪人でしかありえない人間について語ることができます。その罪にもかかわらず、忍耐と寛容と恵をもって私たちを包んでくださっている神の愛についても、語ることができます。ユダヤ人に対するように、律法に違反している罪として罪を語るのではなく、神を神として崇めてこなかったこと、豊かな恵みに充分に感謝してもこなかったこと、神に喜ばれる生活をしようともしてこなかったことこそ罪なのだと、罪の本質を正しく語ることができます。

日本人は昔から、目に見えず説明もできず、ただ心の奥底で感じている気高いお方に、「ありがたい、かたじけない」と頭を垂れてきました。また、その感謝と喜びをいろいろな祭りや行事で表現してきました。「なにごとのおわしますかは知らねども」と、誰に感謝をし、誰にお礼を言ったら良いのか、どのように感謝と喜びを表現したら良いのか分からないままに、自分たちなりにやってきました。神様は、そのような日本人の気持ちを良くご存知で、受け入れてくださっています。ただ、それではやはり不十分なのです。

神は、日本人が感じているよりも、もっともっと・・・・・表現が悪いのですが他に言い方がないので言いますが・・・・人間的感情が豊かで、一人ひとりの人間と近く親しくしようと、願っておられるのです。個人的な付き合いも大切にされる神なのです。多くの場合、神道的感覚の日本人は、個人としての信仰心よりも、地域共同体としての信仰とそ

の表現を大切にしてきました。氏神様を祭ったり御輿を担いだりする感覚です。みんなの神様。みんなの信仰表現が、春の祭り、秋の祭り、地域の祭りとなっています。日本人の場合、地域の共同体意識を強めるための神道行事なのです。

神は一人ひとりの日本人を、個別の人間として祝福しようとしておられることもはっきりさせて、特に、弱いもの、小さな者、のけ者にされている者の味方となってくださる思いやりのある神であると、お話してあげることができます。そのとき、一人ひとりの罪、すなわち、おぼろげであったとしても心の中で確かに感じていた、神を大切にしないできたこと、神を神として正しく崇め、正しく感謝し、その神に喜ばれる生活をしようと心がけてこなかったことを、お詫びするように勧めることができます。神のご厚意に対する不義理をお詫びすることです。そのお詫びこそ、悔い改めの日本版です。

西欧キリスト教を受け入れた私たち、はずいぶん前から、「罪」という言葉を用いて、「悔い改め」を求めてきました。それが聖書の教えだと信じていました。でもそれはユダヤ的感覚、西欧的感覚をそのまま持ち込んだものです。また、翻訳の問題もあります。日本人には理解できないのです。日本人には、どなたかわからない大きく恵み深い方に生かされ、養われ、守られて来たことに対して、充分な感謝の表現をしてこなかったという「後ろめたさ」があるのですから、たとえば、「恩知らず」あるいは「不義理」という言葉が適切ではないでしょうか。「悔い改め」などという輸入された感覚の言葉を用いずに、「お詫び」と言ったらどうでしょう。大きく豊かな恵みで覆って生かし続けてくださった、名も知られていないお方にお詫びして、これからは、このお方を崇め、感謝し、またその愛と哀れみに信頼して生きることを教えるのです。このお方は、人に信頼されることを一番喜んでくださるのです。親が子に信頼されることを、大きな喜びとしているのと同じです。その信頼を、私たちは信仰と呼んでいるのです。そして名前もわからなかったお方のことを、私たちは「天と地をお造りになった神」と、お呼びしていることを伝えるのです。(「信仰」は、神にたいするクリスチャンの態度を表現する言葉としては、適切ではありません。もともとのギリシヤ語の意味は、信仰ではなく、信頼に近いのです)

信頼とは人と人との関係です。ここでは人と神との関係です。神は信頼されることをこの上なくお喜びになります。それは基本的に、人間が他の人に信頼されることを喜ぶのと同じです。もともと、人間の感情の良い部分は、神の性質に似せて造られているのです。ですから神は、その信頼を裏切ることがないのです。その信頼のゆえに、日本人を受け入れ、その信頼のゆえに日本人の罪を許し、その信頼のゆえに日本人を義としてくださるのです。日本人を義としてくださるための手だて、準備は、既にキリストの十字架の贖いによって、しっかりと整っているのです。

十字架

多くの日本人は、穢れの意識のために、自分は神の祝福を受けるには足りないと思っています。神との交わりはおろか、神のみ前に出るのも憚（はばか）られると感じています。そのような恐れを感じないとするなら、神のイメージがまだ霞んでいるからです。

私たちは、恐れることなく、憚（はばか）ることなく、躊躇することなく、神に近づくことができるようにされている、神に甘えることができるようにされていることを、お話してあげることができます。確かに私たちは、大きく気高い神を畏れるあまり、まともな感謝も捧げずに疎んじてきた、親不孝ならぬ「神不孝」の罪を犯しています。神はそのような人間をご自分の下に引き寄せ、豊かな祝福で満たして下さろうと、キリストの身代わりの死、身代わりの刑罰、贖いを準備していてくださったのです。このように説明すると、怒りに狂った神、たけり狂う神ではなく、恵みと哀れみに満ちた神の贖いのみ業として、キリストの十字架を語ることができるのです。

時間的な経過を考えると、まず、天地をお造りになった神の優しさ、寛大さに信頼し、恵に頼んで感謝しながら生きることを勧め、また、神に喜ばれるような生き方をすることを教えることです。そして、そのような生き方には神の助けがあることを教えてあげることです。その上、まず何よりも、神の助け、神の恵み、神の祝福を、もっともっと体験してもらうことです。神は遠くにおられる大きな方であるだけではなく、近くにいて助け、慰め、励まして下さる方であることを、体験させてあげるのです。

そのために、祈りを教えてあげましょう。ありがとうございますと祈り、感謝しますと祈り、褒め称えますと祈り、さらに、助けてくださいと祈り、導いてくださいと祈り、あなたにお任せしますと祈ることを教えるのです。そしていっしょに祈り、自分の言葉で祈るように励ましてあげるのです。そうすると、遅かれ早かれ、必ず、神を身近に感じる体験をするのです。神ご自身が、近づいてくださるからです。そのように神とのお付き合いを始め、神のすばらしさを感じることができるようになると、神の前に素直に悔い改めができ、キリストの十字架を受け入れることができるはずです。

キリストの話から始める伝道は、日本人には向きません。悔い改めの話も罪の話も、そこから始めたのでは、日本人には理解されません。日本人の心に、本能的に潜んでいる神意識から始め、本当の神についてもう少しだけ明らかな理解をもってもらい、そのすばらしい祝福と恵とをまず体験してもらうことが先です。そのために、信頼すること、祈ることを教えるのです。十字架の話、悔い改めの話はその後でいいのです。日本人が救われるのは、キリストの購いと言う神学的知識を得ることによってではなく、神を信頼すること

によってだからです。

おわりに

福音は福音と理解され、福音として受け入れられて、初めて福音となります。パウロの時代のユダヤ・グレコローマンの文化に生きていた異邦人にとっては、ユダヤ主義の理解に基づく福音では、本当の意味で福音となりませんでした。創造者である神についても、キリストについても、現在の日本人に比べると、ずっと理解できる状況にいたことでしょう。でも、救われるためにはユダヤ人になり、ユダヤ人と同じように旧約聖書の律法を厳守しなければならないという条件は、非常に大きな躓きとなって、受け入れることができない人々がたくさんいたはずです。

それに対してパウロは、異邦人はユダヤ人にならなくても義とされる、永遠の命を得ることができることを明らかにし、より多くの異邦人が、福音を福音してとして受け入れることができるようにしたのです。それが、福音をユダヤ主義の足枷から解き放ち、全人類が同じ信仰という条件だけで神の義を得ることができるという、普遍的福音の理解の基礎を固め、全世界のすべての民族が福音を福音として聞くことができる可能性を開いたのです。

パウロが、ユダヤ主義の福音理解を後にして普遍的福音を論じたのは、旧約聖書の正しい解釈に立つものでした。聖霊による啓示と取り成しがあったとはいえ、聖霊の働きだけでは、人々の理解も信用も充分ではなかったことでしょう。人々は、神の言葉と認めその権威を重んじていた旧約聖書から、理論整然と解きあかされたことに説得されたのです。

パウロの普遍的福音の説明は、当時、彼の働きの対象であったユダヤ・グレコローマンの人々には充分でした。ところが現在の私たち日本人のような、まったく異なる文化背景に生きる異邦人には、まだ充分ではありません。パウロの神学を不完全に継承している西欧キリスト教の神学に立つ福音では、日本人を納得させることはできません。それでは、極めて少数の日本人しか福音として聞くことができず、福音として受け入れることができないからです。

今、私たちには、パウロの神学と同じ旧約聖書に立ち、パウロと同じ理論を発展させることによって、さらに一歩進んだ福音理解が必要なのです。パウロは、アブラハムが律法の行いに寄らず、信仰によって義とされたと論じました。律法は、アブラハムが知らないものでした。その同じアブラハムは、キリストも十字架も身代わりの死も復活も知らないまま、ただ、年老いてからでも子どもを与えると約束された神を信頼しただけで、その信

頼のゆえに義とされました。アブラハムが義とされたのは、あくまでもキリストの贖いの働きがあってのことですが、アブラハム自身はキリストのことをまったく知らなかったのです。

　では、日本人はキリストのことも十字架のことも贖いのことも知らないまま、神によって義と認められるのはあり得ないことでしょうか。あり得るはずです。知らなかったと言えば、アブラハムは、神についてもあまり良く知らなかったはずです。少なくても現代の西欧神学が教えるような、神の理解は持ち合わせていなかったことでしょう。しかし、彼はヘブル的には、神を知っていたのです。体験を通して知っていたのです。

　日本人の神理解は非常に低く、到底、神の自己顕現と律法を与えられたユダヤ人たちの神理解には及びません。しかし、日本人が持っている「本能的神観」は、非常に聖書の教える神観に近く、ぎりぎりのところで偶像礼拝にも陥らずに、踏みとどまっているのです。この神観は、人間が神に似せて造られていたときに与えられた人間性、最も深いところにある本能がもたらすものでしょう。

「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と、昔から、誰かは分からないままに手を合わせ、頭をたれ、涙を流してきた日本人に、その誰かをわずかだけ明らかにしてあげ、さらにその方に信頼して生きることを教えて上げるならば、キリストが完成した福音は、日本人にとっても福音になるはずです。